６月２８日（日）主日礼拝レジュメ
「空しさからの解放」　伝道者の書２章１６,１７節

知恵も死を前にしては何の役にも立たず、そして知恵ある者も、愚かな者も同じように死を迎えるのであれば、知恵があることに何の意味があるのか、これもまた空しいと伝道者は言う。

１６節「事実、知恵のある者も愚かな者も、いつまでも記憶されることはない」とあるように、知恵ある者の知恵自体がいつまでも記憶されることはなく、そして個々の存在自体が地上から消し去られるように、完全に忘れ去られる時が来る。存在自体がいつまでも記憶されず、忘れ去られること自体が空しいことではないか。

① 外典の知恵の書２章４節「我々の名は時とともに忘れられ、だれも我々の業を思い出してはくれない。我々の一生は薄れゆく雲のように過ぎ去り、霧のように散らされてしまう。太陽の光に押しのけられ、その熱に溶かされてしまう。」

１７節「私は生きていることを憎んだ」知恵ある者も愚か者もすべての者が死を迎え、いつまでも記憶されることはないから、知恵あることに、そして生きることに何の意味があるのだと思えば、例外なく生きること自体を憎むとの意味。そうなると「日の下で行われるわざはわざわいだ」ということになる。

② ヘブル人への手紙６章１０節「神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れたりなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。」

公平とは、個人や状況ごとの差や必要性を認め、それぞれに合わせて適切

に調整し、結果として不当な扱いが生じないようにすること。神は、不公平な方ではないとは、すべての人の状況を知っておられ、それに応じて配慮されるお方ということ。それと同時に、神は判断基準があいまいということは絶対になく、確固とした基準を持っておられるお方である。そして、神は「あなたがたの働きや愛を忘れたりなさいません」との配慮を私たちに示し、どんな小さな働きであったとしても愛による行いを決して忘れず、それに報いてくださる。

③ マタイの福音書２５章３５～４０節「あなたがたはわたしが空腹であったときに食べ物を与え、渇いていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、わたしが裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからです。」すると、その正しい人たちは答えます。『主よ。いつ私たちはあなたが空腹なのを見て食べさせ、渇いているのを見て飲ませて差し上げたでしょうか。いつ旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せて差し上げたでしょうか。いつ私たちは、あなたが病気をしたり牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』すると、王は彼らに答えます。『まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。』」

聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示したことは、まさに神にしたこととしてどんなことであったとしても、忘れられることなく、報いられる。だから、神のために生きることは決して空しくないと言える。後の世代の人たちが私たちのことを忘れ、私たちの存在が地から完全に消しさられても神は忘れないでいてくださいます。

神を信じて、すべてのことを行う時に何のためにこんなことをしているのだろうかというような思いからも解放される。死をもって人生が終わりいつかは忘れ去られる小さな存在であり、はかない人生でも、神は決して私たちのことを忘れず、私たちのしたことを忘れず、報いてくださることを信じたい。